

# 西洋美術とジェンダー

——視ることの制度

午前コメンテーター 馬 淵 明 子

午前の三つの発表は、新保淳乃さんが「貧者像のジェンダー」において十六、十七世紀の絵画を、米村典子さんが「偉大さ」と女性芸術家の神話」において十九世紀から二十世紀の美術史を、吉田典子さんが「オランダ、ナナ、そして永遠の女性」において十九世紀後半の美術と文学を取りあげ、西洋美術におけるジェンダー研究の可能性を示してくださいました。これらはそれぞれに異なった視点からのアプローチで、新保さんはある社会に登場した新しい概念が、絵画作品にどのように表れてきたか、という図像の研究、米村さんは、ノクリンが指摘した「偉大さ」という概念が、女性美術家にどのようにあらわされてきたか、という評価の研究、吉田さんはマネの絵画が

投じた問題を、別の文学者と画家がどのように受け止めて制作したか、という同時代内の影響関係の研究の発表であったため、

共通の問題として取り上げるのは容易ではありません。もちろんそれぞれにジェンダーの問題と深くかかわっているのですが、互いに関連させて論じるのはたいへん困難なので、ここでは個々の研究の位置づけと将来における展望について私見を述べるにとどめたいと思います。

新保さんの発表は近年の社会史の分野で研究がすすんでいるイタリアの貧困問題に関して、以前には一様であった貧者像が十六世紀においてに変化が見られ、新たなタイプの貧者が登場したことを指摘した歴史研究をベースに、具体的な作品にそれがどのように表れているのかを分析しています。このような歴史研究の成果として、今まで区別されてこなかった細かい貧者像の違いを読み解くことができるようになりました。新保さんは、この時代に描かれた聖人に施しを受ける貧者像（主題はも

ちろん、聖人の徳を表すためのもの)を細かく見てゆき、今までになかった貧者たちに注目しました。それは互いに助け合う貧者、たとえば手押し車に乗った病人を運ぶ貧者、盲人を支える貧者などが、施しに値するべき貧者像として描かれている、という点です。

こうした中でとくに女性像に注目すると、ベールをかぶつてうつむく「恥じ入る貧者」といった新しいカテゴリーも描かれています。この時代は、貧者を、均一に憐みを与えるべき弱者としてのみとらえるのではなく、かつて裕福な階層に属していた、没落した女性たち、未亡人や母子などに対する同情から、彼女たちが施しに値する正しい貧者として描かれている、と新保さんは指摘します。男性たちにおいては互いに支えあう弱者たちが施しに値するとされましたが、女性は未亡人や子を連れ母という、よき妻、よき母のカテゴリーに分類されうる女性たちを新しい枠に入れ、それを「恥じ入る貧者」として表象する、という文化が生まれたわけです。

教会堂に展示され、貧富、年齢、性別を越えた信者たちが見るこのような宗教画において、その社会的メッセージは極めて重要でしょう。近年のルネッサンスにおけるジェンダーの図像学において、花嫁のあるべき立場を教訓的に教え込むカッソーネ、夫婦の寝室の装飾、時禱書などの研究が盛んに行われていますが、教会の絵画も、立場を越えて人目にさらされるといふ意味で、いっそう社会的存在といえます。そうした意味で、こ

の聖人が貧者に施しをするという主題には、読み取るべき多くのメッセージが込められていると言えるでしょう。

以上のような意味で、新保さんの研究は、ジェンダーの視点をさらにはつきりと導入することにより、いっそう明確になるのではないかと思われまます。すなわち、「寡婦」「母子」といった特定の女性像がどのように描かれているのか、たとえば貧しくはあっても理想的な女性性を保持し続けているか、男性で描かれることが多いようにみえる身障者や怠惰な者として女性像が描かれることがあるのか、男性聖人、女性聖人の主題で、女性貧者に相違があるのか等々、新たな疑問が浮かんできます。この分野は表象分析としてはまだ新しく、今後多くの成果を期待できる研究として、注目したいと思えます。

いっぽう米村典子さんの研究は、あまりにもよく知られたリンドン・ノックリンの「なぜ女性の偉大な芸術家は現れてこなかったのか」という一九七一年の論文を出発点に、以後四〇年が経過したことをふまえて、米村さんが「偉大」とされていると考える女性画家アルテミジア・ジェンティレスキについての記述を辿り、アルテミジアがどのように神格化されてきたか、を示すものです。なかでもアルテミジアの仕事が高く評価したメアリ・ガラードのモノグラフは、その埋もれた仕事を明るみに出す重要なものでしたが、じつはそこで依然として男性芸術家を評価する基準であった「偉大さ」が用いられていることを指摘しました。

ノックリンの論文は「偉大さ」は、男性中心社会のシステムから作り上げられた価値基準であった、というものでしたが、ここでひとりの（埋もれた、もしくは低い評価しか得られなかった）女性芸術家を高く評価しようとすると、彼女を既存の「偉大さ」に添わせようとするものになってしまいます。パネラーの香川檀さんは、クリステイーン・バタースという人が、「女性個人個人をいくらかでも天才として褒め称えてもよい、それによって女性全体の底上げになるのだから」と述べている、という例をご紹介しましたが、香川さんも言われているように、またグリゼルダ・ポロックも指摘してきたように、「偉大さ」の価値観を解体しないまま、多くの「天才女性美術家」を量産したところで、女性全体の底上げにつながるとも思えません。それは結局男性的価値観から生まれた「名誉男性」を生み出すだけで、他の女性たちは置き去りにされたままであるからなのです。またアルテミジアに関しては多くの「物語」が紡がれましたが、それは彼女をドラマのなかで悲劇的なヒロインとして描くものでした。それでは、このような甘ったるい「物語」や「偉大さ」をより相対化する仕事をどのように生み出してゆくべきなのか。米村さんはその未来像を具体的に提示してはいませんが、それは私たちに投げかけられた大きな問いとなります。

今まで積み上げられてきたジェンダー研究のなかで、制度や価値観の研究はそうした「解体」もしくは「脱構築」に貢献し

てきましたが、個々の美術家を研究テーマに取り上げた場合、彼女（彼）を、その才能や作品価値をもって「評価」することは避けられないことなのか、それ以外に作品や作家を研究する手立てはどのようなものがあるのか、今後さらに方法論を精査する必要があるかと思います。

吉田典子さんの発表は、専門の文学と美術の交差する点、すなわち、エドゥワール・マネの描いた女性像を、友人の文学者エミール・ゾラと画家ポール・セザンヌがどのようにとらえ、自己の作品に反映させたのかを、詳細なテキストと画像の分析を通して行ったものです。マネの《オランピア》（一八六五年サロン）の横たわる娼婦オランピアと、《ナナ》（一八七七年サロン落選）の下着姿の娼婦ナナの「まなざし」とが、当時のブルジョワ社会規範を揺るがせたことはよく知られています。これらの作品の発表後、彼の親しい友人、前衛的な芸術仲間であった二人もまた強い女性のまなざしに「居心地の悪さ」を感じ取り、それがのちの作品、ゾラの『ナナ』『テレーズ・ラカン』とセザンヌの《モデルヌ・オランピア》《永遠の女性》において、男性の視線の主導権を取り戻そうとしているのではなか、という仮説を証明してゆきます。吉田さんはゾラやセザンヌのみならず、もちろんこの時代の多くの批評家がオランピアの「まなざし」にどれほどの「やり場のない苛立ち」を感じたかを多くの批評を引用しながら説明します。ゾラとセザンヌの直接のリアクションは知られていませんが、それぞれにマネ

の作品を思わせる小説やデッサンなどによる「言及」を指摘し、支配的で挑発的なマネによる女性の「まなざし」を、彼らがいかに緩和し、あるいはふたたび男性の視線の対象として貶しめようとしたかを論証しました。この指摘は、マネの描いた娼婦（あくまでも女性と一般化はできな<sup>3</sup>）の「まなざし」が、いかに当時の男性たちの表象文化を攪乱したか、またいわゆる「前衛」とされた男性たちが、いかにこの点において伝統ないしは既得権に固執したか、という問題が顕在化されました。十九世紀後半のフランス社会のさまざまな階層をあからさまともいえる手法で描きだし、ドレフュス事件において政府を糾弾した果敢な進歩的文化人とされるゾラ、描く対象を幾何学的立体に還元して写実を越えるキュビズムの先駆とされるセザンヌ、これら近代芸術の旗手とも言うべき二人の芸術家の、女性の「まなざし」に対する狼狽と既得権の回復の戦略が暴かれることよって、モダニズム的「前衛」神話の見直しも可能になるでしょうし、またこの時代の女性表象をきめ細かく検証するひとつの視点を提供したともいえるでしょう。

しかし一方でこれほどの問題を引き起こしたマネの立場、彼の意図がどのようなものであったかが、再度問われます。マネの意図に関しては、伝統的な「理想」と「美」の衣をまとった偽善的なブルジョワ社会のタブーを明るみに出した、という意味ではおおかたの見解は一致していますが、彼の女性表象は娼婦もしくはそれに準じる対象を描き、彼女たちはあくまでも男

性の消費の対象として存在しているにすぎません。その臆せぬ「まなざし」が何のためのものだったのか、それはルース・E・イスキンが「売ること、誘惑すること、まなざしを誘うこと—マネの《フォリー・ベルジュールのバー》」(Ruth E. Iskin "Selling, Seduction, and Soliciting the Eye", in Broude and Garrard ed., *Reclaiming Female Agency*, 2005)で述べるように、それは新たな大衆消費社会のなかで美貌をもって成り上がることできた高級娼婦特有の「ぶしつけな」、節度をわかきまねまなざし<sup>4</sup>で、女性の権利の主張とは異なって、自分を金で買うことよってしか所有できないブルジョワ男性への挑発のまなざし<sup>5</sup>だったのではないかと思われるのです。だとすれば、オランピアやナナの視線の向く先は、マネが彼女たちを通して嘲笑った、ゾラやセザンヌのうちにあつたブルジョワ男性としての凡庸で通俗的な、「男性性」ではなかったのでしょうか。

吉田さんの指摘は、ゾラ、セザンヌのみならず、マネ自身のオランピアやナナとのかかわりという論点を生み出し、この時代に量産された娼婦の表象を解く鍵ともなりえると思われる。以上、三名の方の発表のコメントを述べてきましたが、今後の発表も含め、ジェンダー研究の可能性の広がり<sup>6</sup>に感銘を受けました。今後、それぞれの方が提起した問題を深め、参加したフロアの方々もここから受けた刺激を研究の糧として、今後のジェンダー研究の発展に寄与して下さる事を祈ります。